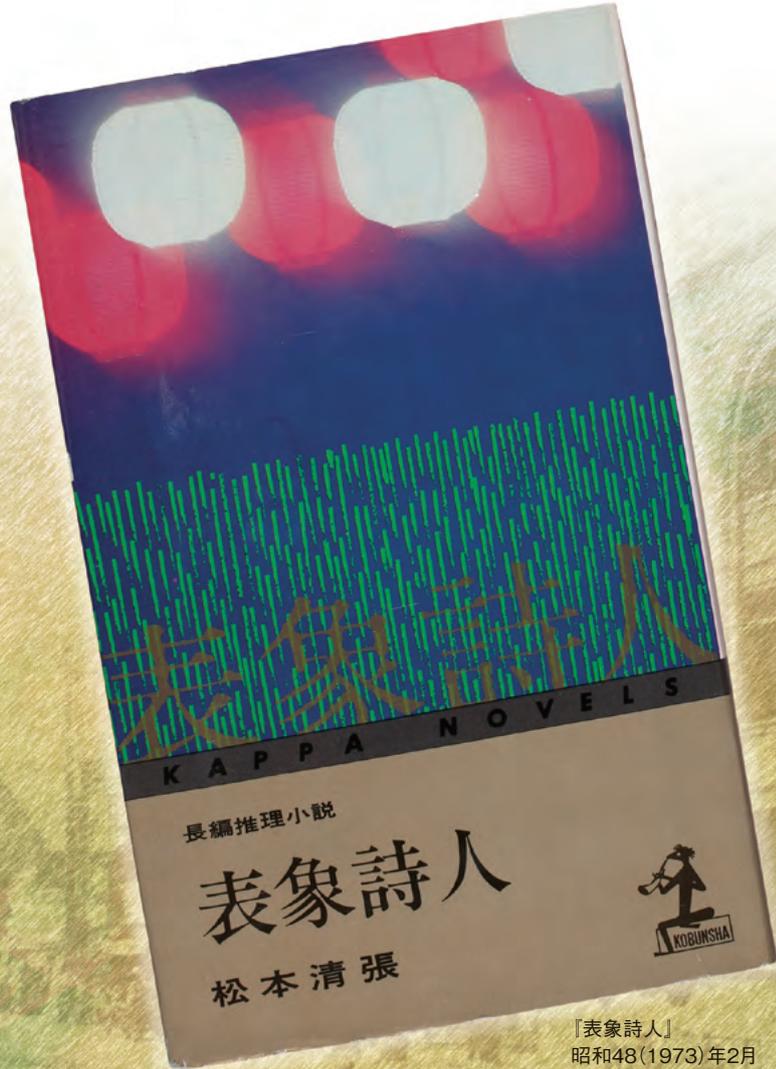


松本清張記念館

◆館報◆

2013.12
第44号



『表象詩人』
昭和48(1973)年2月
カッパノベルス

現在入手できる本
『松本清張全集』第39巻 文藝春秋

あのころの小倉の街を想い出すと、
どこもが静かな風景でうかび上がってくる。

「表象詩人」は、
昭和四十七(一九七二)年七月二十一日から
同年十一月三日まで「週刊朝日」に連載された。

作品紹介

小倉市で私鉄の駅員をしている「わたし」は、市内の陶器会社
に勤務する久間英太郎と秋島明
治とともに、同社の技師・深田弘
雄のもとへ通い、詩論を交わす
文学仲間だった。彼らにとって、都会的な
女性である深田の妻・明子は、密かに憧れ
の対象であった。

ある夏の日、木町で盆踊りがあった晩
に、明子が絞殺された。「わたし」を始め何
人かに容疑がかかったが、久間と秋島への
取り調べは特に入念に行われた。結局、犯
人は捕まらず、事件は迷宮入りし、夫の深
田も、久間と秋島も、陶器会社を去った。
四十年後、「わたし」は偶然から秋島と
再会する機会を得る。長年の疑念に対し、
そこで秋島から語られた内容は、驚くべき
ものだった。

本作は、清張自身の青春時代が色濃く
反映された作品である。北原白秋や、野口
米次郎、タゴールの詩について、文学的回
想録のような趣がある。また、昭和初期の
小倉の街並みが随所に描き出されており、
「木町」「篠崎」「堺町」「紺屋町」などの
町名や位置は、今もさほど変わらない。こ
こにも、故郷を懐かしむ作家の姿が感じ
られる。

(専門学芸員 柳原暁子)

目次

- 市制50周年・開館15周年記念
「横山秀夫講演会」……………2
- 特別企画展「北九州市と松本清張」……………5
- 展示品紹介……………6
- 点描 作品の舞台を訪ねて……………6
- 特別企画展報告「松本清張と邪馬台国」……………7
- 友の会活動報告……………7
- トピックス……………8

清張さんの呪縛

— 清張賞作家として生きるということ —

●平成25年8月4日(日) ●北九州市立男女共同参画センター・ムーブ ●参加者 約500名

いまや警察小説の大御所として人気を博す、作家 横山秀夫さん。世に出られたきっかけは「松本清張賞」でした。担当編集者として信頼の厚い武田昇さんが聞き手となり、時折笑いも誘いながら、忌憚なく語られた創作への想い。その要旨を紹介します。



清張さんの「呪縛」とは

横山秀夫でございます。本日はよろしくお願いたします。(横山)

▼ よろしくお願いたします。横山さん、まず「清張さんの呪縛」という演題ですが。(武田)

凄いいタイトルですね。誰が考えたんですかね。

▼ あ、横山さんです。

僕でしたか!? (笑) そうですね、「呪縛」というとオーバーかもしれませんけれど、冠に人の名前が付いている賞は応募するときに気持ちが変わりますし、後もしかりなものがあるんですね。たとえば江戸川乱歩さんほど古い方ですと銅像のように感じますが、松本清張さんは作品はもちろんです。ご本人が今も存命されているかのように読者の心の中に魚濃く生きていて、そういう意味で生々しい賞でした。受賞後も、いい加減なものを書いて顔に泥を塗ってほならないとか、身の引き締まる思いがするわけです。執筆の際にはある種ケレンの誘惑を感じながら書く訳ですが、「清張さんであれば、ここは強い言葉や派手な言葉は使わない。普通の言葉で、人の深いところに達する方法を見いだしている」とか、常々そういうことを考えながら書いています。

▼ 清張さんは九二年に亡くなられて今日が命日ですね。九四年に「松本清張賞」ができて、横山さんは九八年に受賞されています。ところで、横山さんが清張さんの作品と触れ合ったきっかけは。

中学・高校のころ、父親の本棚の「ゼ口の焦点」や「眼の壁」から読みはじめました。



めました。系統だつてではなく、本棚の左から右まであるもの全部という読み方をしていました。いろんな清張さんの作品が、ポディーブロー(※)のように自分の中に効いてきたと作家になって感じます。

※ボクシングで、腹部を打つこと。

横山少年と

「小説帝銀事件」との出会い

印象的な清張さんの作品は数え切れないですね。わたしは書く方も読む方も長編より短編が好きなのですが、長編ならば「小説帝銀事件」を挙げたいです。様々な人間の葛藤を描いた作品群とは一線を画していて、これはまさしくドキュメント小説です。中学から高校ぐらいに下山事件や帝銀事件といった事件に執着心が芽生え、母方の実家が神田の古本屋街に近かったこともあり、その種の関連本を買って読んでいた時期がありました。

犯人は平沢にあらざとという本はいくらもあるんですが、子どもながらに、何か結論に読者をひきずり込むような作爲を感じ取ったんですね。けれど

ど清張さんにはそれがなかった。新聞記者時代に読み返しても凄いなと思いましたが、ここに持って来たのが昭和三四年の初版本で、二四〇ページほどですが、あの複雑怪奇な帝銀事件のキモが浮彫にされ、あらゆる正と否が対比して書かれています。ジャーナリズム的にも小説家としても、咀嚼力というか、何を切つて何を残しどう繋げるかという点が精密な機械のようだと感服します。

▼ 「小説帝銀事件」は雑誌「文藝春秋」に掲載され、その年最も面白かった記事を決める読者賞を取っている作品ですね。子ども時代のお話をもう少しお伺いできますか。

小学校の時はいじめつこのようなことを言われていたんですね。友達の家の前で「あそびましょ」って呼ぶでしょう、するといつも「あーとーで」と、本人じゃなくお母さんが言っているんですね。(笑) それで仕方なく、学校の図書室に行くようになりました。シャーロック・ホームズから始まってミステリー、ジュール・ヴェルヌなどのSF、世界や日本の文学全集まで、片っ端から読みました。自分のフィリターがまだ綺麗な時に吸収したんですね。いま「物語はかくあるべき」とか、「こういった物語にはこういった展開やエピソードが必要」といったことを直感的に選ぶのは、当時の読書体験が根底にあると思いますね。

物語の終わり方が許せなかったり、もっと読みたかったのという時は、続編を書いて学校に持って行って友達に読ませてもらいました。そうすると、先生に「友達に無理矢理読ませるとは

いけません」と怒られ、ますます孤立する、そういう悪循環でした。(笑)

▼ 帝銀事件や下山事件に興味を持たれたきっかけは。

変質者だったんでしょね。(笑) 謎を含んだ大きな事件に対して、ぶるぶる震えが来るような子どもだったんですね。今でも「わからないこと、隠されていることが明らかにすること」が私にとって唯一のミステリーの定義です。

敏腕事件記者から小説家へ 組織と個人のせめぎあい

▼ そうすると新聞記者にもなるべくしてなったということでしょうか。記者と小説家はものを書く点では似ているようにも壁がありそうですね。

記者は天職だと思っていた時期が確かにありました。子どもの頃から文章を書いていたし、論文募集みたいなものに出せば入選するし、事件好きだし。辞めるまでの一二年間、周囲から

は事件記者をやるために生まれてきた男みたいなことを言われ続けていましたよ。

記者時代は小説よりノンフィクションを読むことが多かったです。嘘やあいまいなことを書いてはならない世界にいましたから、若い記者が原稿に洒落た修飾語なんか使っていると「お前は小説家か？」みたいなね。だから小説を書いてサントリーミステリー大賞の最終選考に残ったとわかったとき、周囲は驚きましたね。

はじめを付けるべく、すぐに辞表を書きました。大賞まちがいなしみたいな話も聞いていたし、上司は「結果が出るまで待て」と言っただけで、待たずにね。ところが蓋を開けたら大賞どころか読者賞もだめ。本にしてもらえれば一つくらいは仕事があるだろうと思っていたんですけど。あのときは真っ青になりましたね。

▼ それから七年後の「陰の季節」は、松本清張さんの冠の賞ということを意識して書かれたのですか。

意識しましたね。新聞記者を辞めて七年、アルバイトしながら小説を応募していましたが、どうしても最終選考を突破できない。子どもも大きくなりますし、もう最後にしようと思っただけで「陰の季節」でした。そういうことを一回も言ったことがなかったかみさんが「こういうのもありますけど」と清張賞の応募要綱の切り抜きを持って来たんですよ。プロアマ問わず、筆歴も書く必要がない。清張さんの顔が浮かびましたね。作品で勝負しろ、と言われたような気がしました。今多くの作品で「組織と個人のせ

めぎあい」をテーマにしています。が、「陰の季節」で初めてそういう作品を書きました。組織を出て肩書きのない個人として七年間生きてみて、「実は組織とはこういうものだったんじゃないか」と新たな視点を持てるようになった。清張さんという冠に刺激され、誘われ、「組織と個人」というテーマを決断したのだと思います。このテーマは古今東西あるのでしょうか、自分なりに実感として染み出すように書けた。今も書き続けているということは、まさしく染み出たものなんだろうと思います。

▼ 記者時代の経験が活かされていますか。

そうですね。勿論一二年間の記者経験が役立つことは確かです。仕事に誇りを持っていましたから、辞めることには葛藤もありました。でも、小川をびよんと跨いだのではなく、流域も深さも大きな川を渡ってジャーナリズムからフィクションの世界に身を投じた自負があるので、ジャーナリズム系の作家と言われることに戸惑いというか、不思議に感じることすらあるんですよ。

嘘を書けない世界にいましたから、たとえば今回の「64(ロクヨン)」で一行目に「夕闇に風花が舞っていた」と書

くようなとき、いま見ているわけでもなく過去に見たかどうかもわからないのに、そういう書き出しをするということ、つまり虚構の物語を作ることに対する罪悪感が沸き上がります。だからこそ、物語がノンフィクションを凌駕するような出来に持つていけないのであれば書く意味がないと思いつながら執筆しています。

ノンフィクションを凌駕する フィクション

新聞記者は「真実を突き止める」のが仕事と自任していますが、とことんやってみて「事実をいくら丹念に積み上げても真実にはならない」という失望感を抱くようになりました。フィクション、物語のほうが、少なくとも人の心という点では真実に近づけるのではないかと信じて書いています。ジャーナリズムは事件や事象を明らかにできますが、人の心は捕まえたつもりでもするっと逃げてしまふ経験を、記者時代に何十回何百回としました。人が深い悲しみの中でふと抱く別の感情や、その瞬間、次の瞬間と移ろう気持ちの変化などは、見ていてわかったとしても事実としては拾いようがない。言葉にされてしまえば、たとえそれが気持ちと異なるものだとこちらが確信していても真実として受け止めるしかないんですよ。「わかりたいという欲求」をずっと持ち続けていますが、その手段として、思慮を尽くした想像力で埋めていくフィクションのほ

横山 秀夫 (よこやま ひでお)

昭和32年東京都生まれ。

新聞記者、フリーライターを経て、平成10年「陰の季節」で第5回松本清張賞を受賞。平成12年「動機」で第53回日本推理作家協会賞・短編部門を受賞。

著書に「半落ち」「顔 FACE」「深い」「第三の時効」「真相」「クライマーズ・ハイ」「影踏み」「看守眼」「臨場」「出口のない海」「震度0」などがある。最新作「64(ロクヨン)」は、(週刊文春ミステリーベスト10)1位などを獲得している。



聞き手 武田 昇 (たけだ のぼる)
文藝春秋「オール讀物」副編集長。
平成15年「クライマーズ・ハイ」より、
横山氏の担当をつとめる。

うが人の心に近く、武器としても強いのではないかと思つてこの世界に転じたわけです。

▼ 横山さんは日航機事故（昭和六〇年）当時記者として取材されていますが、「クライマーズ・ハイ」では現場の描写は殆ど書かれていません。事故から一八年という年月（とじき）に色々考えた末にそういう形に行き着かれたのでしょうか。

記者を辞めて生活に窮していたころ、日航機事故のノンフィクションを書いてほしいという依頼があり、これで本を出せるかと一度は実際に書き出したりもしたんです。結局筆が止



来場者からの質問にも快く応じていただきました。

まりましたが、自分の浅ましが恐ろしくもあり、間違つてもお金に困つていないときや世の中に出ていないときには書かないと誓いました。作家としてデビューして、仕事が安定してきてから、どう書くか本気で考え始めました。「クライマーズ・ハイ」を出せるようになるまでに一八年かかったという事です。

「クライマーズ・ハイ」はノンフィクションに近いと思われているかもしれませんが、けれど事故の事実関係以外はほぼ私が創作したエピソードなんです。地方メディアの葛藤やマスコミの本質や、大いなるものを背負った人々がどう感じ、何をするかという話を、事実ではなく真実の視点で描きたかった。本のキャッチコピーの「記憶でも記録でもないものを書くために一八年かかった」というのは、そういう意味だったんです。

▼ 取材についての質問も多いかと思えます。

編集者には何を取材するか言わないし、一緒に取材旅行もしません。たとえば武田さんのことは好きですけど、編集者は一応敵と見なしています。（笑）どんな商品であれ品質試験を突破しなければ、世の中に出ないわけじゃないですか。本だつて同じです。関所を突破したものが書店に並んでいるという信頼感を読者の方に持つてもらわないと、ますます紙媒体は衰退すると危惧しています。取材して書くまでは作家の責任においてやること。一緒に取材することを否定する訳ではないけれど、私は分業にして馴れ合いを排したい。そうすることで編集

者は、作家から原稿を受け取った時に、突き返すか、没にするか、通すかで編集者生命を賭けざるを得なくなる。お互い全人格を個別に發揮した真剣勝負こそが、結果的にいいものをつくと信じています。

▼ 普段から「編集者が関所だ」とおっしゃっていますね。

『地方紙を買う女』もどきを書いてみる

▼ ここで皆さんにひとつお伝えしたいのですが、宮部みゆきさんが責任編集をされた『松本清張傑作短編コレクション』（文春文庫平成一六年）には、松本清張作家の方が好きな短編をひとつ選んで書いたエッセイを掲載しています。横山さんは「地方紙を買う女」もどきを書いてみる」という作品を書いてくださったのですが、これがエッセイでもあり短編小説にもなっていて驚きました。非常に時間と労力をかけていたのだいて申し訳ないと思つたぐらいです。本当に面白いので、未読の方がいたらぜひ読んでいただきたいです。

わたしは作家のかたとほとんどおつきあいがありませんが、宮部みゆきさんはすごく好きで尊敬もしています。このときは宮部さんが責任編集ということで、簡単に言うかと張り切つた訳です。（笑）ただのエッセイでは気が済まなくて小説一本書いちゃいました。宮部さんも「収録されている」下巻が一番売れた」と言ってく下さいました。辛い時期に声をかけていただき

たことがあって、どうにかお返ししがたかった。そんなわけですから面白いに決まっていますよ。（会場拍手）

▼ 最初に「短編が好き」とおっしゃいましたが、清張さんの短編小説をどう捉えていらっしゃいますか。

長編小説も短編小説も人生の一部分をすばつと切り取つているという点では同じです。たとえ何千枚書いても人生の全部にはなりえないという意味です。ならば短編のほうが潔いではないか、落としと削りに削つて、ある一面を際立たせることこそが本来の小説ではないかと思うことが多いんです。

清張さんの短編は切れ味が鋭いのに、淡々と書かれています。多くの作家は、とりわけミステリーを取り入れる作家はキモを強調して書いてしまう傾向があります。印象にも残りたいし、こういう話だと決定づけたいという意識が働くんです。だから清張さんの作品を読みはじめたころは何だか物足りない感じを受けたりもしました。ここにキモがあるのに、まったく筆圧が同じで、さらりと書かれている。けれど、その「さりり」こそが凄みなのだと次第にわかつてくる。ここでこういう言葉を使えばドラマチックになったり、読み手の感動が高まったりすると当然わかつていらつしゃるのに、力みなく普通の言葉を使って表現していく。それが短編だけになお恐ろしい。余程の力がないとできないことでしょうか、小説を書く行為は特別なことではないという強い覚悟をお持ちだったのではないかなと感じます。

松本清張と北九州市

清張文学の原点

市制50周年 開館15周年記念特別企画展

五市合併以前の小倉市に、松本清張は育ちました。しかし、北九州市は以前から、清張にとってひとつの郷土です。

清張は、上京後もふるさと北九州市と関わりを持ち続けました。本展では、市制50周年並びに開館15周年を記念して、松本清張と北九州市との絆をご紹介します。

| | | | |
|------|---------------------------|-------------|-----------------|
| 開催期間 | 平成26年1月18日(土)~3月31日(月) | 場所 | 松本清張記念館地階 企画展示室 |
| 入場料 | 一般 500円 中学生 300円 小学生 200円 | ※常設展示観覧料に含む | |

I 思い出の中の小倉— 少年期

清張が小学校時代を過ごした頃の小倉は、「或る『小倉日記』伝」の情景にも通じる、静かな城下町の風情を残した街でした。その一方で、軍都として、生産工業の拠点として、発展してゆく北九州の姿があります。



大正11年 天神島小学校
卒業時の松本清張
北九州市立小倉中央小学校所蔵

II 翼を広げて— 青年期

中学校進学が叶わなかった清張は、東洋陶器や八幡製鐵の職工たちと、文学を論じ合う仲間になります。また、演劇や映画が北九州各地で上演・上映されたこの頃、清張も足をはこび、観劇したのではないのでしょうか。



『近代思想十六講』
(大正4年12月 新潮社)
清張旧蔵

III この地に根を張り— 壮年期

清張は、画工として独立したことを契機に、朝日新聞入社へのチャンスを掴みます。所帯を持つと、家長としての責任からますます仕事に没頭することになりました。戦後は、商業デザイナーとして研鑽を積む一方で、小倉郷土会の人たちや、岩下俊作、火野葦平らとも交際を始めます。



昭和27年
清張デザイン
「古代生活資料展」ポスター

IV 遙かな故郷— 上京以後

「西郷札」入選、「或る『小倉日記』伝」の芥川賞受賞により、作家としての道を歩き始めた清張は、朝日新聞東京本社への転勤を経て、専業作家となりました。東京での活躍は、旧知の者にとっては、清張が遠く感じられるような飛躍でした。しかし清張は、事ある毎に故郷・北九州市に戻り、厚情を示しています。



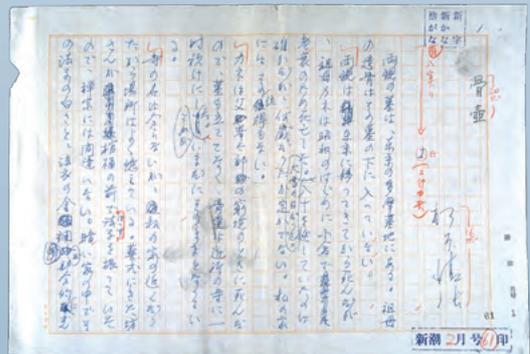
昭和50年 清張自筆の北九州市立
中央図書館著書寄贈目録
北九州市立中央図書館所蔵



昭和52年 北九州青年会議所 創立25周年記念講演会

V 清張文学の原点として— 没後

平成4年、松本清張は亡くなりました。北九州市では、清張を故郷に迎え記念館を作りたいという機運が高まり、平成10年には「北九州市立松本清張記念館」が開館しました。以来、様々な研究や普及事業が実り、国内外から注目され多くの人々が来館しています。ここ北九州市は、清張文学の原点(ふるさと)なのです。



昭和55年「骨壺の風景」原稿

展示品紹介

ガンダーラ仏

第二展示室の階段を上がつてすぐ左のケースの中に、ガンダーラ仏の頭部（写真1）がかざられている。正面から見ると、小さめの口もと



(写真1)

の両端に窪みがあり、かすかに微笑みを湛えて見える。瞑想ふうの眼と豊頬の仏陀の表情には、静けさと優しさがうかぶ。四世紀以降の、ストゥッコ（石灰を用いた漆喰）像である。

仏伝図（今生における釈尊の生涯・伝説）の浮彫や単独仏などを合わせて、松本清張はガンダーラ仏を十九体所蔵していた。「銅鼓とガンダーラ仏」（『芸術新潮』昭和五十年七月）に、「火の路」（『朝日新聞』昭和四十八年六月〜四十九年十月）執筆中に、「偶然の機縁」で骨董屋から数個手に入れたとある。同作で、清張は「中国に入ったときの仏教は、インド仏教と西方宗教である太陽信仰との混血という考え」を書いたが、その混血が「具体的に」ガンダーラ仏に「見られるように興味深い」と感じ、購入したようである。

(写真2)



(写真4)

出口に向う通路の左手、再現実家屋の一部にガラス張りの部屋がある。「資料室」（写真2）である。正面のガラスケースには、横長い仏伝図のプレートが三つのほか、最下段に、縦長のチャイティヤ（仏塔を本尊として祀る祠堂）。

アーチ形の浮彫（写真3）が置かれている。この破風型パネルの浮彫は上下三段に仕切られ、仏伝を表す。離れているので注視してほしいが、頂部は削損がはげしく仏陀



(写真3)

の顔も判然

としない。ただ手首から先の右手は下がり、触地印を結んでいるかと想像されること、ベシヤル博物館蔵のタフティバニー出土の浮彫の頂部（天半欠）がこれと似ていることから、この最上段は「降魔成道」の場面ではないかと推察される。二段目は、台座にきまりの法輪と二鹿はないが、施無畏印を結ぶ仏陀と、説法を聞く五人の比丘を配している。「初転法輪」の場面だろう。そして、最下段は仏陀を中にして両側に合掌する人物を配しているが、未比定の場面である。清張はこれを「瞑想中の釈迦を女人が」困む（誘惑）の場面と解釈し、頂部を「成仏」の場面としたため、物語は普通の仏伝図とは逆に「下から上」になっていると、前記のエッセイでは書いている。左の幅狭いケース側面の奥を覗き込むと、遠くに、菩薩立像（写真4）の横顔が小さく見える。（東京国立博物館に陳列されている（当時）二体のガンダーラ仏と同系統）のもので、ヘレニスティック仏教美術の典型）であると、清張は書いている。その面貌は「まったくギリシヤ人の顔」で興味をひく。近い将来、じっくり見ていただく機会を作りたい。乞うご期待。

（学芸担当主任 中川 里志）

描 作品の舞台を訪ねて

「顔」「球形の荒野」——京都「いもぼう」

石岡貞三郎が料理屋で通された部屋で相席となり、先に食事していたその男こそ、匿名の手紙で自分を呼び出した、井野良吉だった。当然ながら、この時点では、二人はまだお互いの正体を知らない。井野の日記には次のように記されている。



八坂神社・西楼門

少し腹が空いた。何を食べようかと考えた。京都に

きた。（略）正面の石岡貞三郎が静かにぼくの方を見

た。

来たのだから、東京で食えないものを食おうか。それでは、いもぼうにでもしようと思つた。電車を八坂神社の前で降りて、円山公園の方に上つてゆく。（略）部屋に通されて、運ばれたいもぼうをたべる。（略）女中は、三人連れの客と一緒に詰めさせてくれ、といった。いいよ、とぼくはうな

「顔」という小説は、井野良吉と石岡貞三郎、それぞれの視点から交互に描かれる構成となっている。読者は、両者が相席となつてしまふ場面に近づくと、思わず引き込まれてしまふ。その舞台が、「いもぼう」の店である。



円山公園

円山公園内で「いもぼう」を供する店は二軒あり、いずれも川端康成や吉川英治ら文豪に愛されたとして知られている（「平野家本家」「平野家本店」公式ホームページ参照）。

次号では、「いもぼう」が登場するもう一つの作品「球形の荒野」の舞台について記す。

（加地 尚子）

松本清張と邪馬台国 開催しました

—『魏志』『東夷伝』倭人条の謎に挑む

開催期間中、多くの清張や邪馬台国のファンが来館され、8,500人を超える方々が観覧されました。

■ 8月1日(木)→11月4日(月・休)
■ 松本清張記念館 企画展示室

邪馬台国と松本清張の関係を初めて知ったが、コレクションがすごいと思った。(アンケート)

清張の邪馬台国研究の全体像がうまくまとめられています。清張と他の学者との対立点がわかりやすく展示されています。(アンケート)



「古代史疑」関連資料



召集(昭和19年)に際し、清張自身が蔵書印を押した書物。



(蔵書印)

ありがとうございました。魂に触れました。(アンケート)

私たち素人には難解な清張古代史を年代順、課題順、論争点などで整理され、簡潔に展示されていることに感激! 又、清張さんの古代史への並々ならぬ執念!!・強靱な精神とその持続力にふれることができました。企画展を観て、心が動きました。これを手引きとして、未踏の清張古代史へ一步踏み込む勇気と知的エネルギーを満タンにしてくれた企画展でした。(友の会会員Y生)

素晴らしかった。清張の古代史にひたる事が出来た。又、1冊900円の企画展のパンフレットも非常によく出来ていた。内容もていねいでした。(アンケート)



図録は、記念館及び通信販売で販売中

清張コレクション(銅鏡・古銭など)

安心院町の皆さん

友の会 活動報告

● 平成25年度年次総会・懇親会

8月4日(日) 参加者52名
北九州市立男女共同参画センター・ムーブ 5階

横山秀夫講演会の後、平成25年度友の会年次総会が開催されました。前年度の事業報告・決算、幹事選任、新年度の事業計画・予算の審議が行われ、拍手をもって承認されました。総会終了後の懇親会は、会場を松本清張記念館地階ホールに移して盛大に行われました。横山秀夫様も特別参加され、会員向けに特別にサイン会をして頂き、皆様大変感激していました。小林慎也会長や藤井康栄館長の挨拶をはじめ、遠方からの参加者のスピーチなども行われ、和やかな懇親会となりました。

● 清張サロン | 記念館 地階会議室

平成25年度の第1回清張サロンは、特別企画展「松本清張と邪馬台国」をテーマに、又、第2回清張サロンは、特別企画展に関連して「陸行水行」をテーマに講師にお話していただきました。清張サロンならではの詳細な資料を準備していただき、大変有意義で充実した清張サロンとなりました。

- 第1回 9月20日(金) 14:00~16:00 参加者25名
 - テーマ 特別企画展「松本清張と邪馬台国」
 - 講師 中川 里志氏(記念館学芸担当主任)
- 第2回 10月25日(金) 14:00~16:00 参加者23名
 - テーマ 「陸行水行」
 - 講師 小林 慎也氏(元・梅光学院大学教授、友の会会長)

● 文学散歩「清張古代史」伊都国、末盧国等を訪ねて

11月1日(金) 参加者44名
伊都国歴史博物館→名護屋城博物館→名護屋城跡→旧高取邸→鏡山

今回は「糸島市・唐津市」を訪ねました。清張が小説のモデルに書きたかった「原田大六」氏ゆかりの伊都国歴史博物館では、世界最大の国宝「内行花文鏡(銅鏡)」や国宝「ガラス勾玉」などを鑑賞。名護屋城博物館では企画展「秀吉の宇宙」を見学し、復元された「黄金の茶室」や「茶の湯」などを間近で見ることができ、また、旧高取邸では見事な「杉戸絵」や「能舞台」に驚嘆させられました。各施設では解説員や学芸員から詳しい説明を受け、最後は清張も訪れた「鏡山」から夕暮れの唐津湾や虹の松原を眺め、清張古代史への思いを巡らせました。今回も、遠方から沢山の方にご参加頂き、会員同士の会話ははずみ楽しい1日となりました。多くの参加者から「盛りだくさんの内容で良かった」「次回の文学散歩が楽しみ」などの声を頂きました。



● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日~翌年7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、『友の会だより』の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは、松本清張記念館友の会事務局まで
TEL. 093-582-2761

入館者120万人達成!

平成25年9月13日(金)、記念館の入館者が120万人に達しました。120万人目の入館者は山口県下関市の萩原佐和子さんで、お友達に連れられて、初めて入館されたとのことでした。



萩原佐和子さんには、認定書と記念品が贈られました。

当館の柳原専門学芸員が講師を務める



平成25年10月16日(水)、午前10時から2時間、小倉みなみ市民塾「わがまち講演会」で柳原専門学芸員が「松本清張『黒地の絵』-キャンプ城野・黒人兵集団脱走事件-」と題して講演を行いました。

約70名が聴講、熱心にメモをとる姿もみられ、会場は熱気に包まれました。



●**編集後記**● 2013年が暮れようとしています。今年も多くの皆様にご来場いただきまして、有難うございました。

今後も清張の研究拠点として充実した活動に努めてまいります。まずは、初春開催の特別企画展「北九州市と松本清張」で、北九州市制50周年・開館15周年記念事業を締め括ります。その後も多彩な事業を計画。来年も清張記念館にご期待ください。(N.K)



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30~午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日~12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からはバスをご利用いただく便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州市都市高速、大手町ランプより5分



(左) 福永 義臣氏 (右) 久米 雅雄氏

平成25年8月4日(日)、第15回松本清張研究奨励事業奨励金の贈呈式が行われました。入選者は次のとおりです。

研究奨励事業入選者

企画名 松本清張「火の路」と漢魏晋以来「胡印」及び「景教印」等の研究
—印章の世界にペルシャ文化とその東漸をよむ—

入選者 久米 雅雄(大阪芸術大学客員教授)

企画名 松本清張の研究
—「回想的自叙伝」を中心に、社会教育・自己教育の視点から—

入選者 福永 義臣(元・九州国際大学教授)

第15回

松本清張研究奨励事業 奨励金贈呈式

第16回 松本清張研究奨励事業募集

募集要項

- 対象 ①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。
- 内容 入選者(団体)に150万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成26年3月31日までに応募してください。

※詳しくは、ホームページをご覧ください。気になるか、記念館までお問い合わせください。

